

滿洲の旅みやげ

—その二—

武田雪夫

一、奉天にて

奉天へ行くに、商工業の盛んな有様を見て、すぐに私は、日本の大阪を聯想しました。

今は、滿洲國の交通網の結節點として、極めて重要なところとなつてゐて、人口七十萬（内に日本人十萬餘を含む）を誇る奉天は、古く渤海の昔から、元、明、清の諸代、瀋州、瀋陽、盛京と呼ばれて、繁榮した都市であることは、今更申上げる迄もないで存じます。

昔、清の太祖及太宗の居られた宮殿は、今も大西門内に残つてゐます。そこに奉天市ミ省ミの教育會が、事務所を設けてゐました。

私は、そこで、滿洲人の國民學校教師百數十名に、教育、童話、紙芝居等についての問題を講演する好機を得たのでありますが、また他の場所で、日本人の小學校の教師の人たちに話することも出来て共にうれしかつたことを記したいと思います。

この奉天では、私は、北陵へ行きました。

こゝは、清朝第二代太宗文皇帝の陵墓であります。私は、こゝへ案内されて、一步その境域内に入るに、私は、ふと妙な錯覺に陥つたのでした。

——滿洲國內を歩いてゐた身が、いきなり、ぱツミ日本に來たやうな思ひがしたのです。

それは、參道の石疊の兩側に、太い松の木が、何本も何本も、枝をひろげてゐたからでもありませんが、それよりも、その松の梢で奏でられてゐる靜かな松籟の音からでもありません。

念のために申し上げます、滿洲には、實に松の木が少いのであります。しかも、私の見た限では、あるにしても、それは黒松ばかりでありました。なほ、日本と異つてゐる點は、松を決して芽出たい木としないことでありました。むしろ反つて不吉な木として、墓地又は、それに類した場所にしか植つてゐないのであります。

大體に於て珍らしい松を、そこで思ひがけなく澤山に目にし、その上、日本獨自のものやうに考へてゐた松籟の靜かな音を耳にして、私が突如として、「日本」を感じ、身の日本に在る思ひがしたのは、極めて自然の、無理のないことでありました。

特にこの奉天で、他と變つた、珍らしいところとして、同善堂を擧げたいと思ひます。

この同善堂は、今から六十年程前に、左中莊公の設立に係るもので、貧民、醫務、孤苦、工藝の四部に分たれ、相當に整備された方法によつて經營されてゐる社會救濟事業であります。

特に、私生兒の捨子を受取る救生所、娼婦の遁入したのを收容する濟良所、乞食を收容する棲流所等は、珍らしい施設でありました。

その中で救生所は、兩側とも塀の、さびしい通の片側の塀の一部が、少し凹んでゐて、そこに大人の眼程の高さに、救生門と横書にした文字のある穴が開いてゐるのです。

そこへ子供を捨てるさ、その重みで底板が下り、それと同時に電氣のスイッチが入つて、大きな電鈴が鳴出す仕掛になつてゐるのであります。

可愛い赤ん坊を捨てるさいふのは、しかも私生兒であるから、よくよくのこさであるし、それは相當に嚴肅なものであらうと私は思つてをりました。

ところが、遊覽自動車で見に行きますと、ぐるりと遠い門の方から廻つて、その塀の内部へお客をぞろぞろと引つぱりこんだ女案内人は、いきなり、

「……ここが、先程、外の方からご覧になりました救生門でございます。ここへ赤子を捨てますと、その電鈴が……」  
と言つたやうなことを言ひながら、その底板を片手でおさへて、電鈴を、けたたましく鳴らしました。

私は、思はずヒヤリしました。何だか今まで自分の心の中に持つてゐた嚴肅なものを、全く打ちこはされたやうな氣がしたのであります。

## 二、大連にて

地理的には、場所が、前後して、申わけありませんが、今度は、少しく大連のことを記したいと思ひます。

この滿洲國の表玄關とも言ふべき、大連の町は、まことに美しい、靜かな、しかし活氣に満ちた町でありました。何よりも忘れられないのは、ある朝、放送局の車で、局へ放送に出かける時、ご案内下さる婦人の方が、氣をきかせて通つて下さつた遊覽道路でありました。

中央公園の奥の忠靈塔のうしろを大きくまはつて、山の中腹をぬつて上り、一番高いところから見下した大連の町の美しさは、全く、うらやましいやうに思つた程でした。市内の遊覽バスも、この道路を通るやうでありましたが、そこから町の大半が見下せて、實に大きな眺めでありました。

大連の驛は、割合に目立たぬ場所に、低く、つつましかに、しかし近代的の美しさを誇つて、きつしりま坐つてゐました。私は何か、かう、おさなしい美しい娘さんでも見たやうに、非常な好意が持つたのでした。

よく清掃された、タール・マカダムの道路に、アカシヤの街路樹が、何とも言へぬ美しく印象的でありました。それにも増して、美しく感じたのは、この大連でお目にかゝつた、關東州保育會の方々のお心でありました。

私は、たつた四日程しか、大連に滞在しなかつたが、その間に、同會の主なる方々に二度もお目にかゝれたのは、今から思出しても、全く幸のことであります。

はじめでは、放送局の主催にかゝる、幼児童話の座談會の席であり、二回目は、特に同會の方々が、ある場所で、私のために設けて下さつた席でありました。

種々、保育や幼児童話の問題に就いて語つたのですが、特に私は次のやうなことをその節お話ししたことを忘れずに記したいと思ひます。

それは、仕ごの上で、私はいつでも、その時その時として出来るだけ精一ぱい、出来る限りの努力をします。だから、他の方のなさつたごきで、もし何か充分でないごきがあつても、決して、ごめたり、輕蔑したりするごきは私はいらないのです。他の方も、私同様に、力一ぱいになさつていらつしやるものご考へ、そんなに精一ぱいになさつていらつしやるのに、仕事として、萬一不充分のごきであつたら、これだけしかお出来にならないのは、餘程そのごきが、困難なごきであらうご考へるのであります。そして、むしろ、それだけでも成績を擧げてをられるのは、充分の努力があればこそであるごき、善意に解釋するごきでなくてはならぬご思ひます。およそ、そんな話でありました。

さて、この稿を記すに當り、關東州保育會のために、特に一層のご發展を、はるかに祈りたいご思ひます。なほ特に東京女高師のご出身ご承つた、同會長の小山田節子、竝に石田豐子兩女史のご健闘をのぞみます。

又、大連驛まで、可愛いお嬢さまご同道で、お見送り下さつた小山田女史のご厚情に對し、この尊い誌面をかりて、お禮申上げたいご存じます。

なほ、私は奉天から、熱河の承德に出て、次いで古北口を経て北京に入り、北支、蒙疆へご、私の大陸の旅は、三ヶ月に亘つて續けられたのであります。その印象記は、またの折に申上げるごきとして、今は一先づこのペンを擱きたいご思ひます。

### 多田房之輔先生を悼む

多田房之輔先生は我が國幼稚園の長老として、又池袋幼稚園長として長い間我が國の幼稚園界を指導せられてお出でございましたが、十一月十八日長逝せられました。本會は謹んで哀悼の意を表します。

日本幼稚園協會